



©Andrew Bogard

## 指揮者 ケンショウ・ワタナベ

1987年5月14日 横浜生まれ。

2016/17シーズンよりフィラデルフィア管弦楽団アシスタント・コンダクター。2013～15年、ヤニック・ネゼ=セガンのもとでカーティス音楽院指揮科フェローを務める。2017年4月、体調不良のネゼ=セガンに代わり、フィラデルフィア管弦楽団定期演奏会にて、ピアニストのダニール・トリフォノフとの共演によりデビューを果たす。急な代役にもかかわらず、名演を博し、一躍世界的な注目を集めた。2017/18シーズンは、フィラデルフィア管弦楽団のドヴォルザーク《ヴァイオリン協奏曲》にて、ヒラリー・ハーンと共演したほか、ファミリーコンサートやスクールコンサートなどの指揮を多数務めている。2018/19シーズンも同管弦楽団との契約を更新し、来シーズンの定期演奏会に出演するほか、メトロポリタン管弦楽団（モントリオール）との再共演、ヒューストン交響楽団、ロイヤル・スコティッシュ・ナショナル管弦楽団、デトロイト交響楽団と初共演を予定している。また、オペラも得意としており、カーティス歌劇場を中心に多くのオペラ作品を指揮している。近年では2015年にプッチーニの《ラ・ボエーム》、2017年に同じくプッチーニの《つばめ》などを指揮。モントリオール歌劇場では、新演出によるR. シュトラウス《エレクトラ》で、ネゼ=セガンのアシスタントを務めた。

イエール大学音楽院ではヴァイオリンを学び修士号を取得。2012～16年、フィラデルフィア管弦楽団にてヴァイオリンのエキストラ奏者を務めた。若手音楽家の育成への関心も強く、2007年より「グリーンウッド・ミュージックキャンプ」にスタッフとして参加、現在は指揮者として携わり尽力している。

日本人の両親のもと横浜で生まれ、5歳の時、父親の仕事の関係で渡米。その後はアメリカを生活拠点とする。カーティス音楽院卒業。指揮の指導者として名高いotto=ヴェルナー・ミュラーに師事した。音楽の分野の他にも、イエール大学で分子・細胞・発生生物学の学位を取得している。

ケンショウ・ワタナベ <https://www.kenshowatanabe.com/>



## マーカス・ロバーツ・トリオ

ピアノ:マーカス・ロバーツ  
ドラムス:ジェイソン・マルサリス  
ベース:ロドニー・ジョーダン

1995年、マーカス・ロバーツによって結成。

ジェイソン・マルサリスが結成当初よりドラマーを務め、グループの発展に重要な役割を果たしてきた。2009年にロドニー・ジョーダンが加わり、その豊かな音楽性と深い理解は、いまやトリオのサウンドに欠かせないものとなっている。

この3人のミュージシャンで構成されるマーカス・ロバーツ・トリオは、当意即妙な音楽作りと独創的な想像力で知られる。ロバーツはこのトリオの結成により、音楽の方向性を探る上で、対等なパートナーとして3つの楽器に等しく光が当たる、新たなジャズ・トリオのスタイルを生み出した。いずれのメンバーも、旋律や和声構造を損なうことなく、テンポ、調性、拍子など、曲のさまざまな要素をいつでも変えることができ、あたかも最初からそう決めてあったかのように、軽々と自由に音楽の方向を転換してゆく。

マーカス・ロバーツは常々、歴史を重視してきた。彼にとって、偉大なミュージシャンとは、自らが携わる芸術の歴史を深く理解し、熟知している者のことである。そのように自在に操ることができてこそ、真に価値のある斬新な音楽の創造が可能になる。マーカス・ロバーツ・トリオの極めて現代的なサウンドは、ニュー・オーリンズに遡るそのルーツから生じ、コルトレン・カルテットのグループ即興スタイルやビバップ・ミュージシャンの超絶技巧を経て、モダン・ジャズまで続く流れの中に培われたものである。マーカス・ロバーツ・トリオのサウンドは、パワフルでリズムック、力強くメロディックであり、グループおよび個人の高度な即興に溢れている。

マーカス・ロバーツ・トリオ <http://marcusroberts.com>